

増田さんも、シュトラウスのワルツやレハールのオペレッタが鳴り響いていないと勉強も手がつかない重症のながら族。「クラシック愛好家の中には、ウィннаワルツなんて通俗と決めつける人もいるが、理屈抜きに好きなんだから仕方がない。モーツァルトやベートーベンも聴くけれど、しょせんは特権階級の音楽でしょ。ヨハン・シュトラウスに代表されるウィーンの音楽は何よりも大衆の生活に密着している。そこがたまらない魅力です」。

音楽評論家、保柳健氏の話「とにかくアマチュアは興味の対象が偏りがちだが、増田さんの関心、知識は恐ろしく幅広くて、その意味では素人離れしている。生物学の学会報告なんか、いつの間にかウィーン音楽の話しに化けていたり、ドイツ語に関する論文を著したりで、どうやら専門を間違えたのでは——。でもウィннаワルツは二拍目が短い不安定なリズムが特徴で、前へ前へと人間の意欲を駆り立てるところがあるから、その辺が彼のおう盛な活動の秘密かもしれませぬ」。

「自然と共通する美」

専門は植物生理学だが「植物というのは実に美しいもので、こんな気高く、また愛らしい姿がどうしてできるのかと、毎日不思議でならない。そしてウィーンの音楽もまたしかり。自然と芸術——そこに共通する美しさに、限りなく魅せられているわけです」。M.ブリヨンはその著「ウィーンはなやかな日々」の中で「ウィーンの市民たちは死期に臨んでもローマ人のように死の警告を必要としなかった。(中略)彼らは、生が絶えず与えてくれる喜びを、高度に楽しむことで満足していたのである」と書いている。こんなウィーン気質にいたく共鳴する増田さん、「葬式にはお経などいらぬから『ウィーンの森の物語』か『こうもり』『美しく青きドナウ』などを流してくれ」と今から奥さんに遺言しているのだそうだ。(1980年8月10日、日曜日記事)

「松高同窓会支部総会におけるピアノ三重奏」

去る11月1日阪神百貨店グリーンルームに於いて開かれた総会は、私の知る限り、従来の総会とくらべて幾つかの点で極めてユニークであった。従来の挨拶、庶務、会計報告など事務的行事のほか、高橋一田中君のネパール登山報告は啓発的で、大いに感銘を受けた。

さらに印象深かったのは総会後の懇親会冒頭に演奏されたピアノ三重奏による寮歌であった。聞くところによると、幹事の一人、紺田功君の知人でベラ・ムジカを主催する春日女史に依頼し、当日三重奏に編曲した寮歌を演奏してもらうことにしたそうである。

松高支部総会に室内楽とは予想もしなかった。宴会会場に入ったとき、一体何事がおこるのかと私はいぶかった。やがて若い男性一人と女性が二人現われ、紹介があった。ピアノを弾く男性は大阪音楽大学作曲科の講師で、寮歌の三重奏曲への編曲とピアノ演奏を、女性二人は大阪教育大学音楽専攻科学生で、ヴァイオリンとチェロを演奏すると紹介された。間もなく演奏が始まった。寮歌の編曲はまことに巧みで、「月砕け散る」、「若葉の古城」などの美しい音色が宴会場に響いた。

ピアノ三重奏というと、私は少年時代に聴きなれた“カザルストリオ”が真っ先に頭に浮かぶ。SP時代、このトリオの演奏する「大公トリオ」(ベートーベン)をよく聴いたものである。このトリオは当時、世界最高といわれ、その右に出るものはなかった。ピアノがコルトー(Alfred

Cortot)、ヴァイオリンがティボー (Jacques Thiboud)、チェロがカザルス (Pablo Casals) というメンバーで、フランスで結成された三重奏団だったが、「大公トリオ」などベートーベンやハイドンなどドイツの曲が得意であった。ティボーはフランス、コルトーはスイス、そしてカザルスはスペインという出身の異なる三人は、パリで知り合って1905年に三重奏団を結成し、その活動は1933年まで続いた。実は、その連想があったので、このベラ、ムジカが派遣された三重奏団にも、私は「大公トリオ」のような曲を無意識のうちに期待した。

ピアノ三重奏や弦楽四重奏などの室内楽はもともと宮廷の室内に由来したが、18世紀以来庶民も聴くようになった。ピアノ三重奏は室内楽の最重要な形態の一つで、演奏者が一体となってハーモニーを醸し出す弦楽四重奏などとは次の点で異なるといわれる。すなわち、演奏者の個性を発揮しながら演奏技術の華麗さを発揮し、しかもアンサンブルの完璧さが要求される。コルトーの洗練と華麗、ティボーのしなやかさとあか抜けしたフランス風、カザルスの気宇の壮大さと深遠な音楽性が渾然とし、比類のない幅広い表現力と音楽美を創り出したカザルストリオの演奏はまさにピアノ三重奏の最高峰といえた。

さて、ベラ・ムジカの演奏であるが、難をいえばピアノが勝ちすぎ、弦がやや貧弱に聞こえた。ひとり響き、歌うピアノに弦が必死でついて行くという風情で、何とはない不安感を持ちながら聴いていた。ピアノ奏者は寮歌の編曲もした音楽大学の講師であり、弦の演奏者である二人の若い女性は専攻科の学生であるから、ベートーベンを聴くような期待をするのは酷というもので、ピアニストが若い弦をリードしようと頑張ったのであろう。技術はともかくとして、一生懸命に演奏する彼女らの奮闘ぶりには好感が持てた。聴いていると、ヴァイオリンの音色の美しさが時たま顔をのぞかしていたので、彼女の音楽的才能はかなり高いように私は感じた。そこで演奏後きいてみると、彼女の楽器は弦楽器の本場イタリアのクレモナで求めた由、彼女は研鑽を積みばきっと名手になるであろう。また、熱演したチェリストの女性にも声援をおくろう。編曲をしたというピアニストは既に立派な専門家であるが、学生の彼女らの将来はこれからである。経験を積み、腕を磨き、やがて彼らが関西のベラ・ムジカトリオの名をあげる日がくるよう期待しよう。カザルスも無名時代はオペレッタ劇場の演奏者として生計を立て、ティボーはカルチェラタンのレストランで楽手をしていた。司会をした紺田君の「寮歌をきいたことがあるか」という問いに一人の女性奏者は「ある」と答えた。おそらく旅順高校の「北帰行」や三高の「琵琶湖周航の歌」などを聞いたのであろう。やがて彼女らも寮歌の心を理解し、素晴らしい演奏を聴かせてくれるであろう。次回に寮歌の他、ベートーベンやシューベルトを演奏してもらったら、この三重奏団はさらに能力を発揮するのではないか。

蛇足ながら、物部氏作曲の「松高賛歌」の重厚さ、池部氏編曲の叙情性に対し、今回のピアノ三重奏曲の「寮歌」はシューベルト風の洒落た曲につくりあげられ、ピアニストの才能を窺わせた。来年の総会が楽しみである。(松山高等学校同窓会京阪神支部会報、平成9年度)

「京阪神支部平成9年度総会におけるミニコンサート」

昨年の総会に引き続き、今年も総会後の懇親会に先立ちミニコンサートが開かれることを案内から知った。当日のプログラムは「独逸歌曲ミニコンサート」とあり、シューベルトの歌曲